

日江井榮二郎氏ロングインタビュー

第11回：萬法すすみて自己を修証する



高橋慶太郎

〈熊本大学大学院先端科学研究部 〒860-8555 熊本県熊本市中央区黒髪 2-39-1〉

e-mail: keitaro@kumamoto-u.ac.jp

日江井榮二郎氏のインタビューの最終回です。まず前回の国立天文台改組の話題を受け、法人化や昨今の情勢によるさらなる天文台の変化に対する日江井氏の意見を伺います。また、日江井氏は国立天文台を退職した後、明星大学に移り、学長も務めました。天文学に熱心な学生、貴重な古典籍や異分野の研究者との出会い、そして学長としての経験を回想します。最後に、太陽フレアや皆既日食の観測や乗鞍コロナ観測所のことなど、ご自身の研究生生活を振り返っていただき、読者へのメッセージをいただきます。

●天文台改組を振り返って

高橋：前は東京天文台から国立天文台への改組のお話を伺いました。今は法人化して、さらに変わっていますが、最近の天文台について何か思うところはございますか？

日江井：東京天文台が国立天文台になって、東京大学から離れましたね。それから今度は国立大学が法人化してね、国立天文台も自然科学研究機構に入って、大学みたいな法人化の枠の中に入った。そうすると運営費交付金というのをもらうことになって、それが毎年何%減少するという事になったんだよね。それは予測できなかったねえ。改組のときに、私自身もそうだけでも、誰もですね、大学と同じような枠に入るようになって悪いとは思わなかった。

高橋：え、どういうことですか？ そうならないこともできたんですか？

日江井：できたかどうかはわかりません。でも我々は水沢緯度観測所を引き受けるんじゃなくて、我々の方が緯度観測所みたいに大学とは別枠

の機関になるべきであったなあと反省してるの。これはね、私自身もそのときの教授会のメンバーも全然気がつかなかった。

高橋：なるほど、緯度観測所は文部省の直轄研究所でしたよね。だから大学とか大学共同利用機関とは予算とか人事の扱いも違ったんでしょうね。そのようになる選択肢もあったかもしれないということですか。

日江井：だからそのときに何かもう少しうまい考えがあればね。天文の機器はですね、普通の実験機器や施設と違ってもっと長生きをするんですね。物理的な実験装置と天文の観測装置は違うんです。それに国立天文台は研究だけではなくて、国家に重要な暦の仕事もしているわけですから、理化学研究所などのように予算が安定して、減少することがない機関になった方がよかったんじゃないかな。

高橋：国立天文台は大学共同利用機関ですけど、ある意味で大学と同じような立場の機関になってしまったということですね。

日江井：そうです。それ以外にどういう種類の機

関があるかというのはその当時はわからなかった。だからね、国立天文台は法人化して運営費交付金を減らされてそのためにずいぶん苦しんでいる。今それが現役の人を苦しめてるから、改組のときにもっと知恵があって、いい形にできなかったのが本当に申し訳ないと思うなあ。

高橋: まあだいたい苦しんでいるとは思いますがけど、でも1988年の時点で後々そうなるとは想像できないですよ。

日江井: 想像できないでしょ。だけでも、普通の実験施設と違ってさ、天体望遠鏡は長く使えるんだよ。タイムスケールの長い天体現象を調べるものですよ。岡山を見てごらんささい、74インチの立派な望遠鏡なんだけどさ、岡山は今ハワイ観測所岡山分室って名前を変えて、そうでないと生き延びられないくらい。だけでも望遠鏡はまだ使えるんだよね。ハワイのすばるだってそうだよ。もうできてから25年くらい経つでしょう。そうするとやっぱりあちこちが傷んでくるよ。そっちも予算が削られるというのは辛いよ。

高橋: そうですよ。野辺山の45 m電波望遠鏡とか木曾観測所のシュミット望遠鏡ももうできてから40年とか50年だと思いますけど、まだ活躍していますからね。

日江井: そうでしょう。東京天文台というのはもともと1878年にできたんですね。その120周年のときに当時の蓮見(重彦)総長が東京大学のヒストリーをお示しになったんですよ。それを見るとね、天文台というのは遥か昔にたどれるわけ。『天地明察』っていう渋川春海を描いた小説がありますね。

高橋: ああ、江戸時代の改暦の話ですね。

日江井: あれは日本がそれまでは中国の暦をずっと使ってたけど、渋川春海が一生懸命苦労して日本の暦をつくった。ところがそのとき部分日食が京都で起こったのかな、その予報が合わなかったんです。それでまた渋川春海は考え直して、日本の暦(貞享暦)を完成させたんですね。

それが認められて渋川春海は江戸幕府の初代の天文方になって、それから日本の天文の伝統はずっと伝わってると。暦は大事なんですね。暦っていうのは農業とか人々の生活だけじゃなくてね、政治にも大事だよな。東京天文台、国立天文台というのは暦を作ることを任されてて、そういう意味で渋川春海から今に受け継いでるわけだよ。

高橋: そうですよ。渋川春海から数えれば、300年とか400年くらいですかね。

日江井: そうなんです。さらに遡れば、日本が律令国家になったときに天文博士というのがおかれたようですね。だから天文の歴史は長い。

物理の場合にはね、誰かが何か理論を立てて、それが正しいかどうかっていうのを実験で確かめるわけだよ。そのときは5年なり10年なりでできるだけ早く決めようとするわけだよ。それであの説は合ってるとか間違ってるのかいってどんどん進むわけだ。だからね、物理実験というのは人間のつくった理論に対する証左を得る実験ですから、期間が短いんです。

ところが天文、天の文(あや)を調べるのはタイムスケールが違うわけだよ。だから天文の望遠鏡は結構丈夫にできてるんだよね。岡山の望遠鏡にせよ、すばる望遠鏡にせよ。しかし長く使えばどこかの部品が老朽化してランニングコストが必要なわけだよ。

高橋: そうですね、何十年も維持するのは大変でしょう。

日江井: とにかく天文台もそうだけど、全国のどこの国立大学でも運営費交付金が減ってるわけでしょう。どれくらい減ってる？

高橋: 年々1%くらいずつ減っていったら、それが10年続いたら10%減っているとか、そういう感じですよ。

日江井: でしょう。国立天文台もそういうことですよ。これはねえ、運営費交付金を競争的資金の方に移して、努力して成果が出てるところにはた

くさん出して、そうでないところには少なくするのが当然ではないかという議論がどっかであったようですね。努力と成果に応じてお金を出すという、そのアイディアはいい。アイディアはいいけど、それがゆえにですね、研究者は競争をしなきゃいけない。まあ一生懸命切磋琢磨しなくちゃいけないことは確かだ。でも研究者に余裕がなくなっちゃったのがまずいんじゃないかしらと思いますね。

ノーベル賞を受けた人がさ、昔はお金はなかったけど自由はあったと言いますよね。つまり自分の研究で5年後に成果が出るか、もしかしたら成果が出ないかもしれないけども、これが面白いよ、これに魅きつけられたよといって研究する自由があったわけよ。そうするとそのうちに何かふっとひらめいてノーベル賞をもらうような創造的な研究となる。ひらっとひらめくというのをセレンディピティというよね。

高橋: 思いがけないような発見ということですね。

日江井: 湯川（秀樹）先生だってそうじゃない。湯川先生がああのノーベル賞をもらう研究のアイディアをずっと考えててね、寝ようとしたときにふっと何か浮かんだと、それがセレンディピティ。そういうのがあるっていうのはまあ研究者ならみんな知ってるし経験していると思うよ。自分のアイディアを一生懸命しょっちゅう考える。だけど考えてるときには出なくて、並木道を歩いてるときとかさ、あるいはコーヒーをちょっと飲もうなんていうときにふっとひらめきが現れる。研究にはそういうのが大事ではないかしらと私は思う。

座禅は静寂な環境で行いますね。同じように、ひらめきは外からのプレッシャーのない、空の澄んだところにやってくるのではないかな。でも今はそういう静かな環境が少なくなってるんじゃないかしら。だから今までノーベル賞を受けた人が心配して研究に余裕がなくなったと。

高橋: そうですね。たぶん気持ちに余裕がないと、あるときふっと何か思い浮かぶというののもなさそうですね。

日江井: なさそうだね。しかも若い連中は3年だとか5年だとかの任期でさ、もうとにかく何か論文になるものを書かなきゃいけない。5年先に結果が出るか出ないかわからないような長い期間にわたる研究なんかできないわけだね。だからね、競争的資金というアイディアは理屈ではいいんだけど、研究者のそういう余裕とか雰囲気壊したのはよくないんじゃないかしらと思うんですよ。そういう研究者の辛さをね、政治家にわかって欲しいなあ。日本の研究力が世界に比べてどんどんどんどん落ちてますよね。やっぱり余裕がないんだよ。

●明星大学

高橋: 先生は1992年に国立天文台を退職されて明星大学に移りますね。以前、明星大学の学生をたくさん引き連れてパラグアイに日食観測に行ったというお話は伺いました（第6回参照）。それ以外にも学長を務めたり、いろいろあると思いますので、明星大学時代のお話を伺ってもよろしいでしょうか。

日江井: はい。私が明星大学に移ったのは野附（誠夫）先生のおかげなんです。野附先生が明星大学で天文学を教えていたんですね。まだ私が東京天文台にいたころ、野附先生が来られて、「日江井君、ちょっとこの期間悪いんだけど面倒見てくれ」って言われて明星大学に行って授業をしたことがあったんです。1セメスターくらいかな。明星大学がそのことを認めてくれたのかもしれませんが、それで国立天文台を辞めてすぐ採ってくれたんですね。

高橋: 天文学の授業をされたんですか？

日江井: 天文の授業です。

高橋: 日江井先生はそれまでずっと天文台にいらっしゃったわけじゃないですか。もう30年以



写真 日江井研20周年記念会（日江井氏提供）。

上ですよ。そこから私立大学に行くと、環境とか雰囲気が全然違うと思うんですけど、どうでしたか？

日江井: まずはコロナ観測所の重荷から解放されたことですね。森下仙人もリタイアした後でしたしね、天文台にいるときはやっぱり心配で、交代者が無事に観測所に着いたよ、無事に鈴蘭へ降りたよというのを聞いてほっとしていました。だから国立天文台を辞めて、まず肩の荷が降りた感じ。

高橋: 天文台退職までずっと所長ですか？

日江井: そうです。それを今度は桜井（隆）君にやってもらったのかな。その次が末松（芳法）君ね、末松君が最後に観測所を閉めてくれたんだけどね（2010年）。最後まで人的な災禍がなくてほっとしましたね。それが1つ。

もう1つは天文台にいるときはね、ちょうど改組のこともあったんだけどね、内田（豊）君からしょっちゅう電話がかかってきた。教授会が終

わった後とかですね、夜の10時とか11時くらいとかさ。つまり僕らは自分の研究とか生活もあるけれども、天文台全体のことでずいぶん時間を取られてた。用事があれば夜中だって対応するものだと思っていましたね。ところが明星大学に行ってますね、ある先生にちょっと頼みごとがあつてさ、夜の9時くらいに電話かけたら「夜9時はもうプライベートの時間です」って言われちゃってさ。ああそうか、私はまだ頭が切り替わってないと思いましたね。

高橋: その辺の意識が違うわけですね。

日江井: それで明星大学に来て楽になったと思ったら、そのうちに物理学科の主任をやれだとか、それから理工学部の学部長をやれとか、最後には学長をやれということになって、結局似たようなことになったね。

高橋: まずは普通の教員として、授業をしたり学生の指導をしたりするわけですね。

日江井: そうです。4年生の卒業研究の面倒を見

ましたね。物理学科の学生には宇宙天文というものに興味がある学生がかなりいたのね。それで私の研究室に結構できのいいのが来てくれたの。できがいいからね、卒業のときに物理学科の総代になった学生もいたね。

それがねえ、日江井研の第1期の連中の中には本当に天文が好きで好きで天文台を見学に行きたいという学生がいてね。ところがその頃の天文台はね、一般の人の見学には許可が必要だったんです。だからね、じゃあ連れて行ってあげると言っただけで日江井研の4年生を天文台に連れて行きました。そしたら「うわー、天文台が見られて嬉しい！」と言ってくれたわけよ。非常に素直だね、明星大の学生は。

高橋: 今は割と自由に見学できますよね。当時はそうではなかったんですね。

日江井: それでそのときすでに「ようこう」衛星が打ち上がって活躍してたわけ(1991年打ち上げ)。その当時は内之浦でデータを取らなきゃいけなかった。数十分くらい、内之浦から通信が可能なうちにデータを受け取って、すぐに衛星に指示命令を送るわけよ。そういう仕事があってね、宇宙研・天文台の職員だけでは足りなくて、宇宙研でその仕事をしてくれる人を求めてたわけよ。それでそういうのがあるよってうちの学生にちょっと声かけたら、やるやるって言ってきてさ。だから結構みんなね、東京から九州の内之浦へ行ったわけだよ。宇宙研が旅費を出してくれたし、現地の宇宙研の人にもよく面倒をみてくれたって学生から聞きましたね。

高橋: そういうことができたんですね。

日江井: はい、日江井研の第1期の連中というのは非常によくやってくれた。その後も学生が「ようこう」の観測をずいぶん手伝ってくれましたね。彼らにしてみればね、自分が衛星に指令を出せるなんて嬉しいわけだよ。おもちゃじゃないんだもんね、本チャンが動かせるんだからね。宇宙研・天文台としてもね、衛星の運用の手伝いをし

てくれたからずいぶん助かったわけね。そのデータを使って卒論にした学生もいましたね。

高橋: それは学生にはいい経験ですね。

日江井: それから話は変わりますが、明星大学で驚いたのはですね、明星大学にはシェイクスピアのフォリオ版が12冊あるんです。

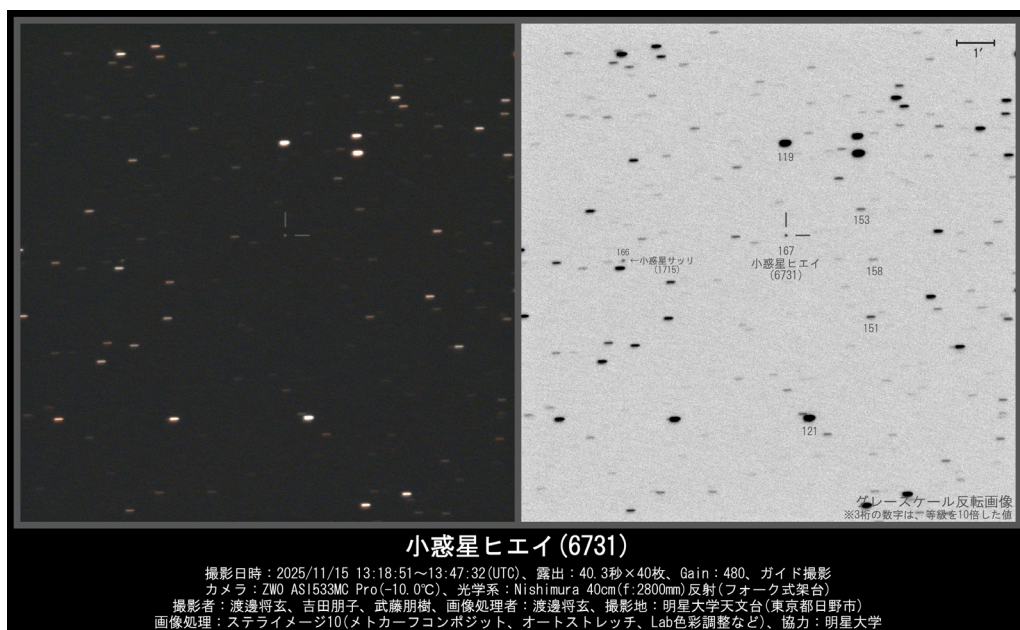
高橋: え、当時(17世紀)出版されたものっていいのですか?

日江井: そうです。理事長・学長の児玉三夫先生はそういう稀覯本を集めるのが大好きだったのね。若者には早くから本物を見せることが重要だったね。そのフォリオ版というのはね、80冊くらいがワシントンD.C.のライブラリーにある。明星大学には1ダース、12冊あって世界で2番目なんだ。へーって思っただけ。

ほかにも欽定訳聖書があって、2冊、「He版」と「She版」っていうのがあった。藤田(良雄)先生はクリスチャンでね、「先生、こういう珍しい本がありますよ」って言うてお招きして、稀覯本ライブラリーに来ていただいたんです。それで東大の図書館長をされた今井功先生とか、私の同期だった学生を数人連れて来られました。稀覯本の部屋へ入るとね、先人の知の偉大さ・荘厳さが心身に押し寄せてきてね、歴史の重みを感じますね。心がすうっと透明になるんです。あれ、不思議な体験だね。その中にはケプラーの『新天文学』はあるし、ガリレオの『天文対話』はあるし、ニュートンの『プリンキピア』もあった(<https://library.meisei-u.ac.jp/collections/>)。

高橋: え、そうなんですか? それはすごいですね。

日江井: そうなんです。児玉三夫先生がシェイクスピアの本を買うときに、そういうサイエンスの本もお買いになったんだそうです。それからキュリー夫人の実験ノートがあってね、それを原子核研究所所長の坂井(光夫)先生にお見せしたら、感動されてましたね。明星大の教員がそのノートの放射能を測定しましたら、まだわずかですが



小惑星ヒエイ (撮影者: 渡邊将玄, 吉田朋子, 武藤朋樹, 協力: 明星大学)。

残っているんだそうです。明星大学にはそういう貴重な本のコレクションがあるわけよね。

高橋: すごいコレクションですね。

日江井: あと明星大学で魅力的だったのは、明星大学にはいろんなフィールドの人がいるわけね。医学部はないんだけどあとはほとんどある。生活芸術学科っていうのが明星大の青梅のキャンパスにあってさ、佐々木豊さんという油絵の先生がいたわけですよ。その人は今はもうリタイアされたけど、当時日本でも有名な洋画家・日本画家50名に選ばれて、その展覧会に招かれたことがありましたね。

それから陶芸の高橋紘先生がいてね、その人のお皿はデパートで高く売ってるような先生。藤田先生だとか平山淳君だとかと一緒に陶芸の教室を訪ねたらね、急に急須を造ることになったんです。藤田先生は初め泥を捏ねるのを躊躇されてたんですけど、そのうち「日江井君、陶芸は面白いですね」とおっしゃってましたね。作ったものに高橋先生が釉薬を塗ってくれて、焼いてくれてま

した。

明星大学青梅キャンパスにはね、備前焼の人間国宝の藤原雄さんの陶板の絵があるんです。「明星から世界へ、愛と力をこめて」という藤原先生直筆の陶板も添えてあるんですね。青梅校の敷地にはトウキョウサンショウウオがいたり自然が豊かでね、行くのが楽しみだったね。天文台ではお会いできないような、とにかくいろんなフィールドの人を知ることができた。それが私にとってはよかったな。

高橋: 1998年から4年間学長ですね。日食観測のおかげでなれたっておっしゃってましたけど、学長のお仕事はどうでしたか？

日江井: 学長は大変よ。学生や教員などの教学のことだけじゃなくて、理事として学苑全体の運営にも関わるんですね。さっき言ったように私立大学の先生方っていうのは天文台に比べると自分の生活を大事にされる先生が多いわけよね。だから私はね、事務の人とよく話をしました。事務は大学の運営を実質的に支えてくれてたし、明星学苑



明星大学学長室にて（日江井氏提供）。

のことをよく知っている人が多くいましたからね。

明星大学のキャンパスって多摩モノレールの中央大学・明星大学駅のすぐ前で、駅をはさんで両大学があるんです。そこにトンネルがあるんだよ。それでその中央大学側の看板は中央大学の学長が書いて、こっち側は明星大学の学長が書きなさいって依頼が来るわけよ。私は太い筆なんか持ったことないけれど学長として書かざるを得ないわけだね。だからこんな太い筆でね、今もって私が書いた看板が見えるわけ。恥をかいてることなんだけど。

高橋：そういう仕事もあるわけですか。

日江井：それからその当時、大学の中には警官が入らないというのが不文律だったよね。けれども警察にお願いして周りを見てもらってたね。学生を守るためにはやらざるを得なかったですね。

あとときどき新聞社の記者が来てですね、「学長として最近何かないか」っていうからさ、逆にこちらから、「どうして新聞は事件ばかり書いて、誰かが善行をしたことを書かないのか」と。するとその新聞記者は、「いやあ、警察に行くところという犯罪があったとかいうのが出ていてそれを書けばいい。だけど善行というのはこっちを立てたらあっちも立てないといけない。どれを選ぶか難しい」ってね。それでもいいから善行を書けばいいと思ってるんですけどもね。

ほかにもスポーツで学生がどっか行くから励ましてやってくれとかね。それから大学名に「星」ってついてるから、学生が通う道に「星の道」って名前をつけたりですね。入学式や卒業式をどのように行うかとか、慣れないことが多かったですから、事務員と相談しながらしましたね。三ヶ月章先生や高幡不動の貫主の川澄祐勝さんに式典の講演をお願いをしたこともあります。

高橋：明星大学って天文系の先生がいつもいるようなイメージがありますね。

日江井：そうです。結局野附先生が天文の講義をされて、それに引き続いて私が入って、その後ずっと尾崎（洋二）さん、佐藤（勝彦）さん、井上（一）さんとか、天文関係の人たちがずうっと行くようになったね。

●研究生活を振り返って

高橋：では先生の研究生活を振り返っていただけますでしょうか。以前のお話で、先生が終戦の日夕日を見て赤いなあと言ったというお話がありましたね（第1回参照）。そういう意味では先生はもうずっと太陽に惹かれて、ということなんですよ。

日江井：私はずっと太陽に惹かれていましたね。特に皆既日食と乗鞍のコロナ観測所です。乗鞍のコロナ観測所は科学者として、皆既日食も初めは研究対象でしたけども、明星大に移ってからは一人間として、自然界の壮大さと神秘さに魅かれましたね。皆既日食のときはですね、第二接触が近づくと異次元に連れていかれるような感覚になるんですね。黒い本影が近づいて、宇宙のマントに包み込まれるような、大宇宙に抱かれるような不思議な感覚があるんです。

高橋：それは実際に体験しないとわからないでしょうね。

日江井：一方、コロナ観測所の勤務は私の人生で大きなウエイトを占めていますね。その村の村長さん、福島清毅さんに会えて、「山は人を育てる」

という言葉聞いたことも大きかったですね。乗鞍コロナ観測所というのは自分で研究するだけじゃなくて、それをサポートするいろんな方がいたわけですよ。食事を作る人もいれば、電力を起こす人、いろんな人が助けてくれたんですね。ありがたいことだと思っています。

高橋: たくさんの人のサポートがあったと。このインタビューでも技官が大事だというお話が繰り返し出てきましたね。

日江井: そうなんです。あと、人命を失うような大きな事故がなかった、それは本当にありがたいことでね、よかったなあと思っています。

高橋: それは本当に素晴らしいことですね。

日江井: それで今、観測所を撤去しようとしてるわけですよ。去年(2024年)の夏には大きなドームを取り外した写真を見せてもらいましてね、あだんだん撤去してるんだなあ。営林署との約束がありましてね、土地を借りて観測所を建てましたので、終わったらきれいに撤去して返すというのが約束で、それが今になってしまったんですけども。

高橋: 1949年に建設されて、2010年に閉鎖ということで60年ですね。先生は1955年に東京天文台の助手になって、1992年に退職ですから、コロナ観測所の歴史のかなりの部分を見てきたということになるわけですね。

日江井: そうですね。乗鞍は梅雨が明けたときの1週間だけシーイングも天気もよくて、いつもそれをねらって観測しました。そういうときは世界に負けられないいい画像が撮れましたけど、やっぱりなかなか外国にはかなわなかったですね。

高橋: 天候がよくないながらも観測を続けて。ルーティンと研究と両方ですよ。

日江井: はい、研究としては、私は若いときにフレアをずっと観測してたわけです。やっぱりフレアに関心があって、フレアの中でも特別な大きな白色光フレア、そのスペクトルを取ろうと一生懸命やりました。

けどもね、やっぱり観測日数が少ないですよ。だから後になって科学衛星を飛ばしたり、バルーンで観測したり、それからロケットで観測したりするようになりました。そうなると、コロナ観測所はもう閉じてもしようがないと思いますよね。だから研究施設でも変えるべきものと変えざるべきものとあって、変えるべきものがコロナ観測所だったんですね。

高橋: でも60年も続いたわけですよ。先ほど、物理実験とかに比べて天文の装置は長く使えるんだということでしたけど、1人の研究者人生より長く使えるわけですね。太陽研究は今でも発展し続けているわけですけど、先生としては今後こういうことがわかればいいのか、こういうことを知りたいとか、そういうのはございますか？

日江井: そうですね、17世紀初頭以来の黒点観測が示している太陽活動の本質、特に磁場の発生メカニズムとか、地上ではできない宇宙環境下におけるプラズマの微細な現象なんかを知りたいと思います。磁場はいろんな活動現象を起こす大切な役割を持っていますよね。

太陽はすぐ近くにある恒星ですからね、微細な現象が見えるんですね。シーイングがよいときには、地上から見て1秒角で見えました。角度の1秒というと太陽では700 kmなんですよ。一方で表面でのスケールハイトは70 kmくらいですからね、だから僕らの頃は10倍ばやっとしたものを観測して研究してたわけです。それが今はみんな努力して、どんどん分解能を上げてそのスケールハイトに迫る細かいところまで観測が可能になりつつあるわけです。

高橋: そうですね、そんなに細かく観測できる天体なんてほかにないですよ。

日江井: それができるのがやっぱり太陽なんです。星じゃ遠くてできないですからね。だから太陽は天文学の基礎的な現象を研究する段階の1歩なんじゃないかと。その太陽の研究を使って恒星や銀河に進んで宇宙の謎の解明に繋がることを期



崇禅寺(桐生市)の銘々碑「太陽は青年 若き光のち育む」(日江井氏提供)。

待しています。

私は太陽の恩恵を人一倍受けているんです。今から6年ほど前に桐生の崇禅寺から石碑を建てるので、協力してほしいという話がありましてね。境内に弥陀の小径っていうのがあって、1980年に21基の銘々碑が建立されたんですが、2019年に7基が新たに付け加わったんですね。私は、青年期の太陽と同時代に生を享けているっていう恩寵への感謝を石碑に込めまして、建てていただきました。

●読者へのメッセージ

高橋: では最後に読者の皆さんにメッセージをお願いします。

日江井: 私は定年間際にですね、道元の『正法眼蔵』の言葉を思い出したんですよ。「自己をはこびて、萬法を修証するを迷いとす。萬法すすみて、自己を修証するは悟りなり」と。つまり自分の方から天文学でもなんでも自然の現象を理解しよう、研究しようというのは迷いだよ。逆にですね、自分が自然と一体の状態となると、様々な天のきまりというのが自分の中に入り込んでくると、そういうのが悟りだよ。そう言ってるんじゃないかしらと勝手に思ってるんだけどね。

高橋: 自然の法則がこちらに入ってくるというこ

とですか。

日江井: 朝永(振一郎)先生もそれに似たことを言っていてね、『物理学とは何だろうか』って、あの岩波の名著ね。あそこにさ、「一生懸命一生懸命、物の奥のその奥のその奥まで考えていると、自然の女神がちらっと本物を見せてくれる」と書いてあるんですよ。それと同じようにね、先ほども湯川先生の話を出しましたが、1週間かあるいは1ヵ月か数年か、もう考えに考え抜いてると、ちらっとそういうアイディアが自分に入ってくることがある。物事を一生懸命考えていると自分が自然と一体化する。それが悟りなんじゃないかと思うんですね。

高橋: 科学の研究に通じるところがあるわけですね。

日江井: ところが、与えられた式をただ当てはめて使ってやれば自然現象を理解できるのではないかと、そういう研究をしてればそれはもう迷いだよと。私なんかずいぶん迷いの研究をやったんだなあと思ってですね、若い人たちは湯川先生とか朝永先生のように本当に考え抜くといいんだろうと思いますね。道元っていうのはすごいことを言ったなあと思っておりましてね、若い人も一生懸命研究に研鑽してほしいなあと思っております。

高橋: 先生の現役の頃と比べると、今はだいぶ違う研究環境になっていると思いますが、いかがでしょうか？

日江井: 私が現役の頃の東京天文台は、職員も少なくて(1987年の職員数は216名)、事務の人と一緒に運動会を開いたりして、全員の顔がわかっていたんです。今は職員がもう倍以上ですね(2025年は518人)。観測装置も大型になって、予算要求をするにも国内外の様々な事情を考慮しなきゃいけないというような複雑多岐な組織になったようです。社会のいろんな面で多様化が進んでいますからね、そういう時代のやり方というのがまたあるんでしょうね。

今の時代、情報がとても豊富になってきましたが、世の中の流れにあまり流されないようにして欲しいと思います。私が昭和20年8月15日に、理屈はわからなかったけど体を感じたようにね、世の中の言うことをそのまま信用しないでですね、やっぱり自分がよいと思う方向に進んで欲しいなと思っております。

私は日本が戦争に向かっていく風の中で、小・中学校時代を過ごしました。時代の風にさからうと特高（特別高等警察）に連れていかれるよと脅かされてね、特高は怖い存在としてプレッシャーとなっていましたね。それで昭和20年8月15日の敗戦を境に世の中が混乱しました。私共日本人は、かつては和魂漢才、明治時代には和魂洋才、敗戦後はアメリカからいろんなことが入り込んできて、外国の知識や技術の吸収に努力してきましたね。しかし、多くの場合、知識や技術の表層を学んだだけで、それらを生んだ文化の深奥ではなかったんじゃないかと思います。外国では通用しても、日本ではなじめない制度も入ってきましたからね。

今日、日本では学問の本流から外れて、ややもするとすぐ役立つことや、目に見える結果が得られることが重視されがちです。自分が現役のころ、30～40年ほど前には、そういう今の研究環境の厳しさを予想できませんでしたね。今は、当時より情報が多くて将来の予測は難しいけれども、数年先、数十年先、数百年先の将来に向けて、喜びながら天文学の研究をしていただいて、自由に創造的な思考と深い洞察を発揮していただ

きたいと願っています。萬法すすみて、自己を修証することを期します。

高橋：どうもありがとうございました。

●おわりに

日江井先生へのインタビューは国立天文台にて2019年から2025年にかけて9回にわたって行われました。三鷹の塔望遠鏡や第一赤道儀室を案内していただいたこともありました。長いインタビューに付き合っていた日江井先生、また写真の掲載に協力いただいた方々に感謝いたします。

A Long Interview with Prof. Eijiro Hiei [11]

Keitaro TAKAHASHI

*Faculty of Advanced Science and Technology,
Kumamoto University, 2-39-1 Kurokami,
Kumamoto 860-8555, Japan*

Abstract: This is the eleventh article of the series of a long interview with Prof. Eijiro Hiei. First, following on from the previous discussion about the reorganization of the National Astronomical Observatory of Japan, Prof. Hiei gives his views on further changes at the observatory brought about by incorporation and recent developments. After retiring from NAOJ, Prof. Hiei moved to Meisei University, where he also served as president. He looks back on his encounters with students passionate about astronomy, with valuable classical books and with researchers from other fields, as well as on his experiences as university president. Finally, he reflects on his research career, including observations of solar flares and work at the Norikura Solar Observatory, and gives a message to the readers.